

# 榊原本八幡の本地(上)

— 影印、翻刻 —

黒田彰  
坪井直子  
筒井大祐

## 〔抄録〕

八幡縁起は古代、中世に流行した八幡信仰を背景とする縁起絵巻で、北野縁起などと共に我が国の社寺縁起を代表する絵巻の一である。小稿では従来、甲乙類に分類される八幡縁起絵巻の乙類に属すると見られる新出資料、愛知県刈谷市の榊原家の所蔵に掛る、八幡の本地二巻をカラー影印、翻刻により紹介する。紙幅の関係から本号にはその上巻を、次号に下巻を収録することとした。

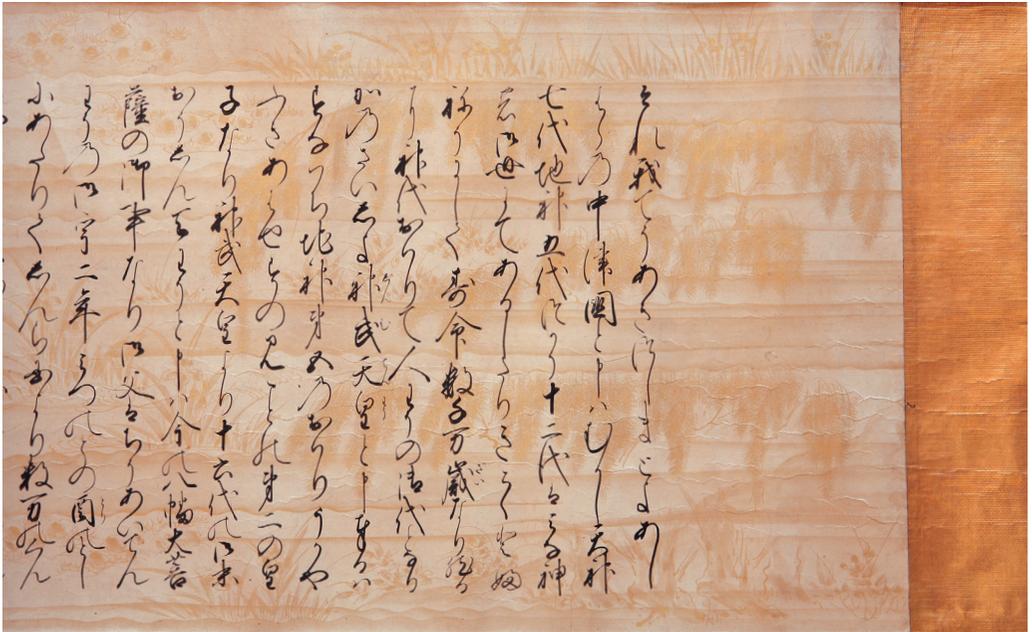
なお『京都語文』17号(平成22年11月)には、同じ八幡縁起絵巻甲類の新出資料、東原本八幡大菩薩御縁起(上巻)を紹介したので、併せて参照されたい。

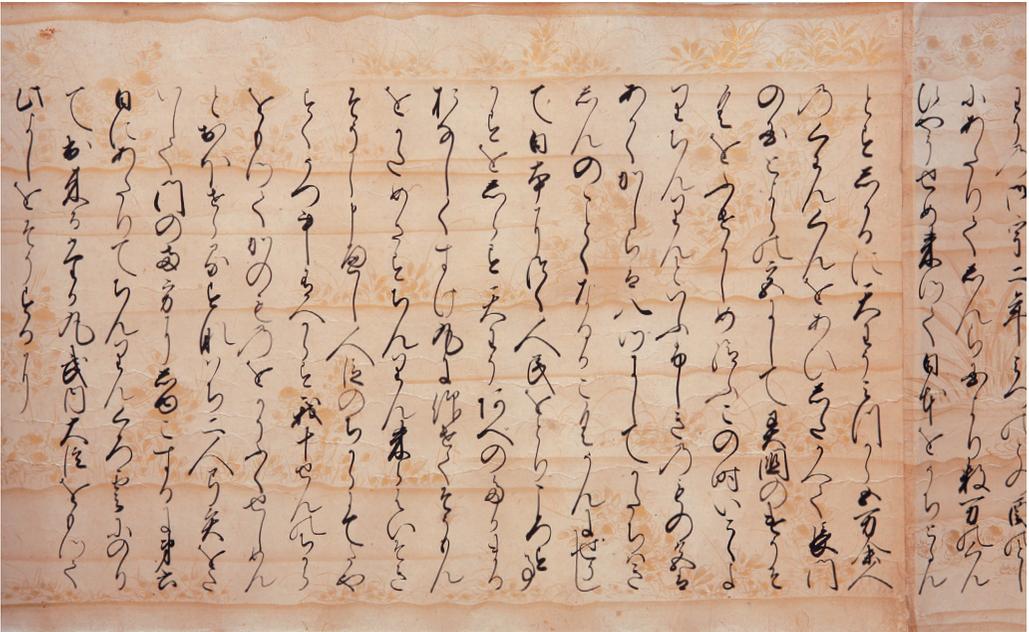
キーワード 八幡の本地、八幡縁起絵巻、社寺縁起、奈良絵巻、

御伽草子



榎原本 八幡の本地(上) (黒田 彰・坪井直子・筒井大祐)











神原本 八幡の本地(上) (黒田 彰・坪井直子・筒井大祐)

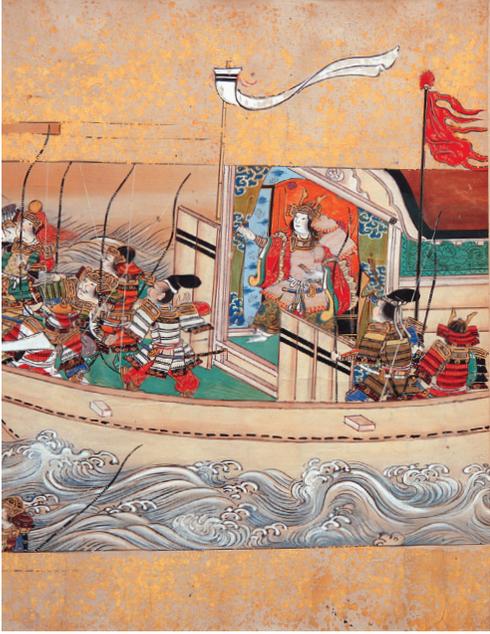












しとをうしつふがくしつらふか  
ほふ大ぬれしとたりまといし  
神くしつれれみかたりうら  
あつらふんこのは事也神武  
しりこつこつこつこつこつ  
かのつらうあひより我ちこつ  
つらあつらつあつらつらつ  
てつらあつらつあつらつら  
つらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつら







つるつるの月の事なほはらり  
 めもつとてはらりののりわら  
 わしとりましとつれまの村を  
 まりととりてはらりののりわら  
 きよ今のも

女は女わたりありのまじりてふ  
くまふとてはありてこのまじり  
高良大明神白美しとて入る  
大海をらむ比しひくく此れ  
いづれあはれとていひて  
私りありそんくそんくそん  
よりそてしつんを日本に  
つうちんはにありてあはれ  
り水いさ事や梅文とてあはれ  
おどなく大海あふありてあはれ  
いづれ大海とてあはれとて  
とてあはれとてあはれとて

魚のい

花下りおとと

あはれとて

くまふとて

あり

まじり

## 略 解 題

近時、御縁があつて、愛知県刈谷市の榊原家の所蔵に掛る、八幡縁起絵巻を閲覧することが出来た（以下、榊原本と称する）。昨年、『京都語文』16号の表紙を飾らせて頂いた、塵輪襲来の場面の写真一葉の原本がそれである。榊原本は、寛文頃の制作と思われる、極めて保存の良い、美麗な絵巻二巻であつて、最近京都の古書肆から購入された由の、新出の八幡縁起絵巻である。今般、榊原家の御許可が頂けたので、当論集の本号にその上巻、次号にその下巻の、カラー影印と翻刻とを掲載することとした。

まず榊原本八幡縁起絵巻の書誌的事項を記す。本書は、江戸前期写、紙本着色の絵巻上下二巻（上巻10米38糎、下巻10米18糎）で、詞書が13、絵が12（上巻詞書7、絵6、下巻詞書6、絵6）から成つており、表紙（原）は縦33・4糎横26・3糎（上巻。下巻は縦33・2糎横26・4糎）、詞書は、下地に金泥の草花を散らした料紙に、漢字平仮名交じりで綴られている。外題は、題箋（原）に「八幡の本地上（下）」とあるが、内題はない。箱があり、蓋の中央に「八幡の本地 二まき」とも墨書されている（その側面に「八幡本地」（朱）、「第十五号」（墨）等と書かれた貼紙がある）。

さて、八幡縁起絵巻は、鎌倉時代写の伝本を存する、古く且つ、著名な中世縁起絵巻の一つだが、例えば宮次男氏はかつて、その諸本を大きく、

甲類（「八幡大菩薩御縁起」）

乙類（「八幡宮縁起」）

二系統に分類し（中間に位置するものもある）、それら二系統の先後に

ついては、「甲類本が先行し、それにもついで乙類本が再編成された

と推定できる」と述べて、乙類本成立に際し八幡愚童訓（甲本）の関与のあつたことなどを指摘されており（「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起」上中下、『美術研究』333、335、336、昭和60年9月、61年3、8月）、それらのことは、今日においてもなお動かない（八幡縁起絵巻の分類に関してはまた、松本隆信氏によるA、B分類等もある（増訂室町時代物語類現存本簡明目録、『御伽草子の世界』所収、三省堂、昭和57年）。そして、榊原本は、その内の乙類本に属するもので、その流布を考える上で極めて貴重な遺品と言うべきである。乙類本は、永享五（一四三三）年足利義教の奉納に掛る、有名な絵巻が現存し（菅田八幡宮蔵「神功皇后縁起」など）、それを濫觴とする系統と思われるが、なおその成立や甲類本との関係、また、その流布の状況等、八幡信仰自体が中世を代表する大きな信仰の体系であるだけに、今後の考究を要する課題は数多い。榊原本がそのような資料の一つであることは言を俟たない。

翻刻に際しては、改行及び、表記は原本通りとし、濁点や句読点等は施していない。用字は通行の字体に従う。また、本文中に絵の入る箇所は、図一以下の形で示した。」は、紙継ぎを示す。

付記 本書の影印、翻刻を許可された、刈谷市の榊原家に対し、心から御礼申し上げたい。なお小稿は、平成22年度科学研究費基盤研究(B)による成果の一部である。

（くろだ あきら 日本文学科）

二〇一〇年十月十二日受理

## 「八幡の本地上 翻刻」

それ我てうあきつしまとよあし  
はらの中津国と申はむかし天神  
七代地神五代つかう十二代はみな神  
の御世にてあるしたりきこくとふ  
ねうにして寿命数千万歳なり然る  
に神代おはりて人わうの御代となる  
かのさいしよ神武天皇と申奉るは  
すなはち地神第五のおはりうかや  
ふきあはせずのみことの第二の皇  
子なり神武天皇より十六代の御末  
おうしん天わうと申は今の八幡大菩  
薩の御事なり御父はちうあいてん  
わうの御宇二年みつとの酉のとし  
にあたりてしんら国より数万のくん  
ひやうせめ来つて日本をうちとらん  
とすしかるに天わうみつから五万余人  
のくわんくんをあひしたかへて長門  
の国とよらの宮にして異国のけうそ  
くをふせかしめ給ふこの時いこくよ  
りちんりんといふふしきのもの色は  
あかくかしらは八つにしてかたちはき

しんのことくなるかこくうんにせうし  
て日本につく人民をとりころす事

かすをしらす天わうあべのたかまる

おなしくすけ丸に仰せてそうもん

をかためさすちんりん来らはいそぎ

そうし申へし人臣のちからにてたや

すくうつ事有へからす我十せんのちから

をもつてかのものをかうふくせしめん

とおほせらるすなはち二人弓矢をた

いして門の両方にしゆこするに第六

日にあたりてちんりんくろ雲にのり

て出来るたか丸武内大臣をもつて

此よしをそうするに

みかと御弓をとり」

矢をはけて

はなち給へは

かのちんりんか

くひたちまちに

いきられて

かしらと身と

ふたつになりてそ

おちに

ける」

## 図一

かゝるところになにとかしたりけん  
なかれ矢まいりてきよくたいにつゝ  
かなく来りてあたる御いのちすて  
にあやうくみえさせ給ひければき  
さきしんくうくはうこうをちかつけ  
て仰られけるは我いかにもなりな  
はくはうこう大將くんとして異国を  
うちたいらけ給ふへし御はらにやと  
り給ふはわうしにてましませはたん  
しやうののち御くらゐにつけたて  
まつり給ふへしとおなしき九年  
二月六日御とし五十一にてつくしの  
檀日の宮におゐてつゐにほうきよ  
おはんぬくはうこうすなはちせんくわう  
の御ゆいせきにまかせてしんらはく  
さいをせめんかために数千きのくん  
ひやうあひくして異国におもむき  
給ふていとをさせ給ふに一人のはく  
はつたる老人出来りてくはうこうの  
御まへにかしこまるくはうこうはいか  
なるものそと御たつねありければ  
かのらうおうこたへて申さくわか君

かたしけなくもいこくをうちしたか  
へんかためにおほしめしたゝせ給ふ  
このおきなも御ともつかまつりて  
御ちからになりまいらせんと申ける  
くはうこう御こゝろのうちにおほしめし  
けるは此老人のていさしてちからに  
なるへしとおほえすさりながらへん  
けのものにてやあらんとおほしめし  
てめしくしてちんせいへおもむか  
せ給ふくはうこうびんごのともにつかせ  
給ふときたけ十丈はかりなるうし  
沖のかたより出来りてのらせ給へる  
御ふねをそんなんとす其時らうおう  
かのうしの二つの角をとつて海中へ  
なけたれはひとつのしまとなつて今  
にありうしまとゝいふ是也文字には  
うしまろはしと書たり」

図二

是よりしてくはうこう此らう人たゝ  
人にあらずとたのもしきことにお  
ほしめして御身ちかくめしてな  
に事もおほせあはせられけり其  
のち志賀の関の上大江かさきと云

ところにつかせ給ふおりふししほ  
のしふんにて御ふねかよふへきやう  
もなしその時このおきなたゝ一人  
してくはうこうのめされたる御ふね  
ともをおき中へみなをしいたしける  
人々ふしきのおもひをなしけり又あ  
しやのつといふ所につかせ給ふとき此  
おきな弓矢をとり出しこくうにむ  
かつてはなちけるを御らんすれば  
ゆくゑもなき大なるいはの十ちやう  
はかりさし出てみえけるをよつひき  
いければものにもあらずいとほしたり  
くはうこうを

はしめたてまつり」

供奉ぐふのくはん

ぐんとう

きゐのおもひ

をなすまことに

人りきの

およふ

ところ

に

あら

す」

図三

そのゝちかしゐのはまといふ所にて  
くはうこう此らうおうをめしておほ  
せられけるは我異国へわたりつくと云  
ともかのてきともをたやすくうち  
したかへむやうなしにかにせんと給  
ひければおきな申やうこれより西に  
しかのしまと申所にあとへのいそらと  
いふもの有海中に久しくすみて  
あんなひしやにて侍ければ此ものを  
めしてりうくうしやうにつかはして  
かんしゆまんしゆといふ二つの玉を竜王  
にからせ給へ此二つの玉たにも候はゝし  
むらはくさいとうをせめしたかへ給は  
む事いとやすき事なりと申け  
れはくはうこうくたんのいそらをは何  
としてかめすへきとおほせければお  
きな申さくこのわらはせいなうと申  
まひをあいし侍る此まひをは又ならま  
ひとも申すなり海中にふたひをかまへて  
此まひをまはせられはくたんのわらは  
さためてきたるへしと申皇后くはうこうこの  
まひをはたれ人かまふへきとの給ひけ

れはその時らうしんさらはおきなま  
ひ侍らんといふにすなはち海中に  
ふたひをかまへてくふの人々おんがく  
をそうするにらう人このまひをまひ  
すまし侍りければくたんのいそら此  
まひをあひしてまひのすかたになり  
しやうゑをたいしはゝきをしてくひ  
につゝみをかけたり海中ひさしく  
にひさしくすみたるゆへにかきひし  
なといふものかほにひしと取つきて  
あまりに見くるしかりければしやう  
ゑの袖をときてかほにおほひして  
かめのかうにのりてふたひちかく出  
くるさてこそこの舞をは

今の世までも布を

おもてにたれ

侍るなり」

図四

かの海中に石となりて今に侍ると  
なんさてくはうこうらうおうにおほせ  
られけるはくたんの玉の事かのわら  
はにおほせふくむへしとのたまへはお  
きな申さくいそらは海中のあんなひ

にてぐふし侍るへし御ししや人をさた  
めらるへしと申ければそれらう人は  
からひ申へしとちよくちやう有ければ  
さらはくはうこうの御いもうと豊姫を  
御つかひとしてくたんの玉をめさるへし  
とておきなちよくちやうのおもむき  
いそらにおほせふくめけるはなんちし  
らすや日本の御あるししんくうくはう  
こうの御ほんゐをとけ給はんかために  
しんらはくさいとうをせめしたかへんと  
し給ふなんち日本国にありながら玉  
命をいかてそむきたてまつるへき  
はやくせんしにしたかつてちうせつを  
いたすへしなかんつくりうくうに二つ」  
の玉あり此たまをかりて人力をつ  
いやさすして異国をせいはずすへき  
はかりことをいたすへしさあらはくし  
たてまつりてりうくうにおもむ  
きてちよくせんのおむねをりうわう  
に申へしとありしかはすなはちいそ  
らとよひめをあひくしたてまつりて  
りうくうしやうにおもむきけり竜  
宮にゆきむかひてかんしゆまんしゆ  
の二の玉をかりえてつきの日さうたん

にきさんしてこれをさゝく皇后なゝ  
めならず御かんありてみことのりし  
て御ふねつくるへしとありしかは三  
百人化人にはかに出来りてなかとの  
国ふな木山に入てさいもくを出してふ  
せんの国宇佐のこほりにして四十八  
そうのふねをつくりいたすこれすな  
はち八まん大ほさつ本地あみた如来  
にておはしませは六八てう世のひくわ  
むをへうし給ふなるへしかのらう人は」  
住吉大明神にておはします此御  
神と申は地神第五のおはりうかやふき  
あはせすのみことの御事也神武天わう  
よりこのかたの百わうはことくく  
かの御へうゑひなり我しこの御めくみ  
ふかきによりて人りんのかたちとけんし  
て皇后の御力とならんとてつきた  
てまつり異国をせめしたかへ給ふ  
こそめてたけれ

図五

またいそらと申はちくせんのお国しかの  
島の明神の御事なりひたちのくに  
にてはかしまの大明神これみな一体

ふんしん同たいのいみやうにてましま  
すかその時すわあつたみしまかうら

以下の神たち三百七拾五人四十八そうの  
船に同じすかたにけんし給ふそうし

て其勢壺千三百七拾五人四十八そう  
のふねにのりつれてちくせんのかに

かの島よりこきいたす大将くんには  
高良大明神なりくはうこうもたち

まちなんしのすかたとなり給  
ひ御たけ九尺式寸御はは壺寸五分

ひかり有みとりの御くしひんつらに  
とりからはにわけて御かふとをめし御

手にたらしゆのまゆみ八めのかふら矢  
をとりそへて弓を御たらしといふ事

はこのたらしゆよりはしまれりと  
なんからあやおとしのよろひをたて

まつる御うみ月の事なれば御ちぶさ  
の大きにして御よろひの引あはせ

あはさりければかうら大明神くさ  
すりをきりて御わきのしたにつ

け給ふ今の世に

わきたてといふは

これより

はし

まり

けり

## 図六

かゝりけるところに皇后御さんのけ  
いてきさせ給ひ御はらしきりになや

ましくおほしければつしまの国に  
て御舟よりおりさせ給ひ白石にて

御はらをひやしつゝ御はこしに石  
をはさみ給ひわかにはらみたてま

つるところの御子日本のあるしと  
なり給ゝ今月たいなひを出給ふへ

からすとねきことし給ひて又船  
にめされけりさるほとにいこくのひ

やうせん十万八千そうくんひやう四十九  
万六千余人のりつれてせめ来るいこく

のくんひやうは大勢なれば日本のひやう  
せんをうんかのことくとりこめて一と

にうちころさんとすすなはち皇后高  
良大明神をつかひとしてちよくせん

のむねをおほせければしんらかうらい  
とうのこくわう大しんてうひしてかん

く日本はかしこき国なるによつて」  
女人を大将とするなりあなとりてふ

かくすへからすとてせめかゝるこのとき

高良大明神白色の玉をうみへ入給ふ  
大海たちまちにひてろく地のことし

いこくのけうとよろこひてことくく  
船よりおりたつてくはうこうをうち

とりたてまつらんとす日本の船には  
りうしん下にありてしゆこするゆへ

に水ひる事なし扱又青き色の  
玉をなぐる海水みなきりてもとの

ことく大海と成ててきくんことく  
くしほ水におほれて

魚のことし

死する物かすを

しらす更に

かなふへきやう

なかり

けり